

# 保育の表現技術の獲得を目指して

— 学生自身の自己評価から授業方法を考える —

平 尾 憲 嗣  
藤 原 一 子  
小 川 宜 子

岡崎女子短期大学研究紀要45号 抜粋

平成24年3月25日

# 保育の表現技術の獲得を目指して

## — 学生自身の自己評価から授業方法を考える —

平尾 憲嗣\* 藤原 一子\*\* 小川 宜子\*

### 要 旨

保育者養成校に入学する学生の音楽経験は減少の傾向にある。短期大学の2年間という限られた短い学習期間で、保育現場に対応できる表現技術を育むためには、入学時の段階で、ある程度の読譜力が必要である。しかし、今日の学生の現状は、日ごろから音楽を聴き、楽しんでいるようだが、楽譜には慣れておらず、音高、音価などを読むこと、さらには、それらから新しい音楽をイメージして表現する経験が乏しいと感じられる。

そこで、本研究では、本学1年次「基礎音楽I」受講生を対象とし、入学時の音楽レベル、および前学期期末試験時の意識を調査した。具体的な方法として、学生自身が技術力や表現力の習得について、どのような意識を持って学習しているかを自己評価させた。これは、単に試験で出来たか否かを問うたものでなく、試験から次に何を課題とするかを即時に分析させることで、課題目標をたてる意識を啓発させようというものである。また、試験時の学生自身の自己評価と指導者の評価を、学生のピアノ学習レベルによっていかであるかの比較を試みた。

### Abstract

For students with limited music experience to develop their expression technique to be enough for childcare within two years, they have to be able to understand music scores and use them for imaging new music. This research had students evaluate themselves on their mental attitude toward technical acquisition to enlighten their consciousness of target setting through quick analysis of their assignments, and compared their self-evaluation results on piano-playing skill acquisition level with those of their instructors.

### はじめに

平成22年7月に、厚生労働省により児童福祉法施行規則の一部が改正された。

それに基づき、本学では、「基礎音楽」と「幼児音楽」の授業を開講している。1年次で受講する「基礎音楽」では、保育者として、子どもの音楽活動を援助できる音楽力を育むために、豊かな感性と音楽の基礎的技能を身につけることをねらいとし、2年次で受講する「幼児音楽」では、様々な音楽活動を通して、楽しさや喜びを経験し、自らの音楽力を高めると共に、保育実践において必要な知識や技能を習得することを目標としている。

授業形態としては、ML機器を使用した集団授業を行っており、一斉授業とピアノの個人レッスンを行っている。

近年、大学入学時までにピアノを学習した経験のない学生が増えており、我々の担当クラスでも、50%を超える学生がピアノ学習初心者である。それ

に対して約15%の学生は、大学入学の時点でバイエル教則本を終えており、約半数はピアノ経験者で、クラス内における学生間のピアノ経験の開きが見られる。

「基礎音楽I」の授業は、ピアノ演奏技術を高めるためのテクニック曲集とピアノ練習曲、ならびに楽典とコードについての学習である。この授業は、1年前期の音楽導入であるため、表現する豊かな感性を身につけることを常に意識した授業を行っている。学生の技術力と表現力を高める効率的で的確な指導を行うには、我々が学生の習熟度、および音楽意識をどのように持っているかを把握することが大切である。

そこで本研究では、学生自身が技術力と表現力の習得意識を明らかにするために、学期末試験後に学生自身による自己評価（5段階の尺度）の調査を行った。

調査内容は、学期末試験課題曲での幼児曲、およびピアノ曲の試験の結果から、学生自身の自己評価

\* 岡崎女子短期大学幼児教育学科

\*\* 岡崎女子短期大学非常勤講師

と教員の評価の比較を行った。それは、本授業の目標とするねらいが、学生の意識の中でどれほど理解されているかを分析するものである。

## 1. 授業方法

### (1) 授業の形態

1 クラス約40名、2名の教員によるML授業。

### (2) 使用教材

- 1) ピアノ教本（以下、ピアノ曲と記載）
  - ・バイエル教則本、終了者は各ピアノ曲集
  - …ピアノの基礎的な演奏法を習得
  - ・「子どもの表現活動に役立つピアノテクニック」(圭文社)（以下、テクニック本と記載）
  - …ピアノの基礎的な指のテクニックの向上
  - ・「子どもの表現活動を導くコードネームによる伴奏法」(圭文社)（以下、コード本と記載）
  - …コードネームの理解と簡易伴奏の実践
- 2) 幼児曲集
  - ・「子どものうた村 保育の木」(ドレミ楽譜出版社)（以下、幼児曲と記載）
  - …幼児曲の習得

## 2. 研究概要

### (1) 調査の方法

幼児教育学科第1部1年生に対してアンケート調査を行った。調査は前期最終週（試験次）に実施し、同時間内に回収した（回収率100%）。

### (2) 調査の対象

幼児教育学科第1部1年生2クラス（計81名）

### (3) 調査の内容

- ① 学生の入学前の音楽経験の有無と、現在の練習時間と習熟度。
- ② 読譜・演奏能力と、楽語への意識に対する自己評価。
- ③ 授業内で用いている教材の習熟度に対する自己評価。
- ④ 前期実技試験に対する自己評価。

以上によるアンケートを実施し、上記②から④は、学生に5段階の尺度で自己評価をさせた。なお、④においては、教員も学生と同内容のアンケートを用いて、5段階の尺度で評価を行った。

## 3. 調査結果

### (1) 入学時の学生の音楽経験について

入学時と前期終了時の個々のピアノ学習進度は、表1の通りである。

表1 入学時ピアノ学習経験と前期終了時のピアノ課題進度について

	入学時		前期末	
	人数	%	人数	%
初めて	6	7.4	0	0.0
バイエル60番まで	36	44.4	0	0.0
バイエル80番まで	18	22.2	28	34.6
バイエル終了まで	3	3.7	22	27.2
ブルグミュラー、アラカルトなど	4	4.9	21	25.9
ソナチネ、ソナタ	8	9.9	6	7.4
その他	5	6.2	4	4.9
未回答	1	1.2	0	0.0
計	81	100.0	81	100.0

本調査において、ピアノ学習の習熟度を比較するために、初心者からバイエル60番までを「レベルⅠ」、バイエル80番までを「レベルⅡ」、バイエル終了までを「レベルⅢ」、バイエル終了以降を「レベルⅣ」と表記する。

表1は、入学前のピアノ学習経験と前期終了時のピアノ課題進度の比較である。入学前学習（バイエル60番程度まで学習）を課しているにも関わらず、入学時にはレベルⅠに当たる学生が42人（51.8%）を占めていた。次に多いのが、レベルⅡの学生で18人（22.2%）、レベルⅣの学生は12人（14.8%）、レベルⅢの学生は3人（3.7%）であった。

前期試験時には、レベルⅡの学生が28人（34.6%）と最も多く、レベルⅠの学生は0人（0%）へと推移した。レベルⅢの学生は3人（3.7%）から22人（27.2%）へと移行し、学習の成果がみられた。また、レベルⅣの学生も12人（14.8%）から27人（33.3%）へと増加し、多くの学生が学習成果をあげ、次のレベルに進むことができた。

### (2) ピアノの練習時間について

学生たちが個々に、授業以外でどの位の時間を練習に費やしているかを調査した結果は表2通りである。

表2 1週間のピアノ練習時間で、1日の平均練習時間について

	人数	%
30分未満	4	4.9
30分位	23	28.4
1時間～1時間半位	44	54.4
1時間半～2時間位	9	11.1
2時間以上	1	1.2
計	81	100.0

1週間の平均練習時間が1時間～1時間半位練習を行っている学生が最も多く44人（54.4%）であり、次に多いのは30分位の練習時間の学生で23人（28.4

%)であった。1時間半から2時間位の練習時間の学生は9人(11.1%)、30分未満の練習時間の学生は4人(4.9%)、2時間以上の練習時間の学生はわずか1人(1.2%)であった。

30分未満の練習時間の4人の学生の内2人は、入学時にはレベルⅠであったが、2人とも前期終了時にはレベルⅡへ進むことができた。他の2人は入学時からレベルⅣで、前期終了時も入学時と同じ、レベルⅣであるが、多くのピアノ曲を学習している様子が見うけられた。

練習時間が2時間以上の2人のうち1人は、入学時のレベルはⅠであったが、前期終了時にはレベルⅡへ進むことができた。

練習時間が1時間半～2時間位の9人中3人は、入学時からレベルⅣであり、それぞれが多くの曲に取り組んでいた。

### (3) 高校までの音楽経験について

高校時代に授業もしくは部活において、音楽経験の有無を調査した結果は表3の通りである。

表3 高校での音楽経験について

	人数	%
授業、部活ともに経験なし	24	29.6
授業で経験あり	41	50.6
部活で経験あり	4	5.0
授業、部活ともに経験あり	12	14.8
計	81	100.0

授業で音楽経験のある学生が41人(50.6%)であり、授業、部活ともに経験のない学生は24人(29.6%)であった。授業、部活ともに経験のある学生は12人(14.8%)であり、部活の経験がある学生は4人(5.0%)であった。

ここでは、高校時代の音楽経験をもつ学生が多くみられたが、その音楽の経験がどのような内容であったか、本調査では明らかにすることはできなかった。

### (4) 学生の練習成果(自己評価)について

学生の練習成果を具体的に把握するために、「読譜能力…音(音高)を読むこと」「読譜能力…音の長さ(リズム)を読むこと」「指使いを守って弾くこと」「曲に書かれている強弱記号を守ること」「曲に書かれている記号(アクセント・スタッカート)を守ること」「幼児曲のレパートリーを増やすこと」「ピアノのレパートリーを増やすこと」の項目について5段階の尺度にて自己評価させた結果は表4の通りである。表5は表4のそれぞれの項目に対して、

学生のレベルからみた自己評価の結果である。

#### ① 「読譜能力(音高)を読むこと」についての、各レベルにおける自己評価の人数、および%(表5-1)

「読譜能力…音(音高)を読むこと」は、「ややできた」が42人(51.9%)と最も多く、次いで「どちらともいえない」が16人(19.8%)、「とてもできた」が14人(17.3%)、「あまりできなかった」が9人(11.1%)で「全くできなかった」は0人(0%)であった。

レベル別で見ると、「あまりできなかった」の9人のうち8人がレベルⅠであった。「楽譜を読むことが苦手」「音の違いは分かるようになったが、読むまではできなかった」などの自由記述における学生の回答から、読譜能力(音高を読むこと)が低いことは明らかであった。

また、レベルⅢ、Ⅳの学生については、「あまりできなかった」「全くできなかった」は0%で、「前に習っていた」「小さい頃からやっていたので音は読めました」などの回答が多く、ピアノ経験の長さが読譜能力(音高を読むこと)を育てていることが明らかであった。

「どちらともいえない」と回答した学生は、楽譜に慣れてきてはいるが、楽譜から音にするにはまだ不安が残っていると思われ、レベルⅠが9人、レベルⅡが5人、レベルⅢが1人、レベルⅣが0人という結果であった。このことから、バイエル終了付近で、読譜能力(音高)が身につくようであった。読譜能力を早く身に付けることで、より正確に多くの曲を習得することが可能となるため、入学後初期の段階で、音楽的基礎知識の学習を促すことが必要であることが明らかであった。

#### ② 「読譜能力(リズム)を読むこと」についての、各レベルにおける自己評価の人数、および%(表5-2)

「読譜能力…音の長さ(リズム)を読むこと」は、「ややできた」が28人(34.6%)、「どちらともいえない」も28人(34.6%)と最も多く、次いで「あまりできなかった」が17人(21.0%)、「とてもできた」が8人(9.8%)、「全くできなかった」は0人(0%)であった。

レベル別で見ると、レベルⅠの「あまりできなかった」は13人であり、表5-1の同項目と比べてみると、若干ではあるが、読譜(リズム)の方ができなかった学生が多いことが分かった。自由記述では「細かくて複雑なリズムがうまくいかない」「あ

まり意識していなかった」「中途半端な長さにしてしまった」などの回答が目立ち、読譜においてリズムを読む意識より、正しい音の高さを把握する意識の方が高い学生が多いと思われる。その理由として、音楽を構成している旋律は、コード進行と密接な関係をもって作曲されており、リズムより音の高さの方が間違いを認識しやすいためと推測できる。

楽譜を演奏する際の一番最初の作業である読譜は、正しい音楽知識による正確な楽譜に対する認識力が必要であるため、特に、レベルⅠの学生に対して、音楽的な基礎知識を高めながら、より多くの楽譜に触れることで読譜能力を向上させる必要性を感じた。

③ 「指使いを守って弾くこと」についての、各レベルにおける自己評価の人数、および% (表5-3)

「指使いを守って弾くこと」については、「ややできた」が最も多く40人 (49.4%)、「どちらともいえない」が21人 (25.9%)、「とてもできた」が11人 (13.6%)、「あまりできなかった」が8人 (9.9%)、「全くできなかった」が1人 (1.2%)であった。

レベル別に見てみると、レベルⅣの12人中7人が「どちらともいえない」との回答だった。

レベルⅣのブルグミュラー、ソナチネ、ソナタ、ピアノアラカルトなどの曲について、基本的な指使いが身に付いていない段階での演奏は難しいと考える。したがって、このレベルⅣの学生は、課題の曲の難易度からみて、基本的な指使いの知識はすでに身につけており、必ずしも楽譜どおりの指使いを使用しているとは限らないと考えられ、個々の手の大きさや指の長さに適した指使いで練習していることが推測できる。

「とてもできた」と回答した初心者5名の学生は、1名がレベルⅣ、4名がレベルⅢへと課題を進めることができおり、指使いを守れなかった学生と比べると、課題の進捗が早かった。幼児曲には指番号の記載がないため応用力が求められ、特にレベルⅠ、Ⅱの「あまりできなかった」「全くできなかった」と回答した学生に対して、指導者が適宜指番号を指定するとともに、指番号を守って引く習慣をつけることを周知させる必要があるだろう。

④ 「強弱記号を守ること」についての、各レベルにおける自己評価の人数、および% (表5-4)

「曲に書かれている強弱記号を守ること」については、「あまりできなかった」と答えた学生が最も

多く27人 (33.3%)、「どちらともいえない」が22人 (27.2%)、「ややできた」が20人 (24.7%)、「とてもできた」が8人 (9.9%)、「全くできなかった」が4人 (4.9%)、であった。

レベル別に見てみると、レベルⅠの学生42人中「とてもできた」が1人、「ややできた」が12人と、強弱記号を守って演奏することの意識を持っている学生がレベルⅠの中で、13人 (31.0%)という結果であった。逆に「どちらともいえない」「あまりできなかった」「全くできなかった」が29人 (69.0%)であった。

この結果から、レベルⅠでは「強弱記号を守ることについて」あまり意識していない学生が半数を超えていることが明らかであった。

レベルⅠの自由記述では、「弾くことに必死になりすぎてしまった」「音符に集中しすぎて見ることができなかった」などの回答が多く、ピアノ経験が浅いため、音を間違えずに演奏することに気をとられ、強弱にまで意識が及ばなかったようだ。

逆にレベルⅣの学生12人中「とてもできた」が3人、「ややできた」6人と、強弱記号の必要性を認識している学生が、レベルⅣには多数いることが分かった。

基礎的技術を高めながら豊かな感性を身につけるためには、強弱記号を意識して守ることが重要である。それによって音楽の表現が変わることを、学生自身が楽しみ、感じながら演奏する習慣を促していく必要性を感じた。また、表示記号を守れなかった理由が、基本的な音楽知識の不足、あるいは演奏技術不足などの他に、レベルごとにどのような理由が挙げられるのかを調査する必要性を感じた。

⑤ 「記号 (アクセント、スタッカート等) を守ること」についての、各レベルにおける自己評価の人数、および% (表5-5)

「曲に書かれている表情記号 (アクセント、スタッカート等) を守ること」については、「ややできた」が最も多く33人 (40.7%)、「どちらともいえない」が30人 (37.0%)、「あまりできなかった」が11人 (13.6%)、「とてもできた」が5人 (6.2%)、「全くできなかった」が2人 (2.5%)であった。

レベル別に見てみると、レベルⅣの学生の12人中「とてもできた」が1人、「ややできた」が10人と、レベルⅣにおいて多くの学生が表情記号を守ることについて高い意識を持って練習に望んでいることがわかった。

また、レベルⅠ、Ⅱにおける学生の表情記号に対

する意識の低さがこの結果から読み取ることができた。「弾くことに精一杯でいつも忘れてしまう」「弾くことに必死で忘れてしまう」などの自由記述における回答から、表情記号を表現するところまでの余裕がないことが、「強弱記号を守ること」と同様明らかであった。

さまざまな表情記号の意味を認識することと、それがどのような表現を促しているのかを考えさせること、そして積極的に表現することを徹底させていく必要性を感じた。また、「強弱記号」と比較してみると、全レベルにおいて「表情記号」を守ることの方が、意識が高かった。それは、スタッカート（表情記号）が記載されている音符を普通の音符のように演奏してしまう場合と、フォルテ（強弱記号）で記載されている音を何の意識もせずに演奏してしまう場合を比べたとき、音の長さ、および音の形に直接影響を及ぼすのは表情記号であるが、強弱記号は音価自体に直接影響を与えないため、表情記号の方に自然と意識が向いてしまっていることが原因ではないかと推測できた。

⑥ 「幼児曲のレパートリーを増やすこと」についての、各レベルにおける自己評価の人数、および%（表5-6）

「幼児曲のレパートリーを増やすこと」については、「ややできた」が最も多く30人（37.0%）、「どちらともいえない」が22人（27.2%）、「とてもできた」が15人（18.5%）、「あまりできなかった」が13人16.1%、「全くできなかった」が1人（1.2%）であった。

レベル別に見てみると、レベルⅠの学生に「あまりできなかった」「全くできなかった」の回答が多いことが分かった。自由記述では、「課題以外になかなか進める事ができなかった」「授業でやった所しかやっていない」という回答が目立ち、その週の課題の練習に時間を費やしてしまい、過去に練習して弾けるようになっていた曲の復習をする時間がなく、新たにレパートリーを増やすことが難しい様子がかがえた。

一方で、「とてもできた」と自己評価している学生がレベルⅠで6人もおり、同レベルにおいて達成度に大きな開きがあり、レパートリーを増やすことに対する意識の差が結果として大きくあらわれているものと推測できた。また、幼児曲は必ず保育の現場で用いられることから、より多くの曲を知っておく必要があるが、曲によって音楽の様子や表現が

異なるため、多くの曲を同じように演奏するのではなく、子どもに曲の特徴を感じてもらえるような、曲に適した表現力が伴った演奏が出来るよう、学生に促していく必要性を感じた。

⑦ 「ピアノ曲のレパートリーを増やすこと」についての、各レベルにおける自己評価の人数、および%（表5-7）

「ピアノ曲のレパートリーを増やすこと」については、「どちらともいえない」が一番多く34人（42.0%）、「ややできた」が16人（19.8%）、「あまりできなかった」が20人（24.7%）、「とてもできた」が8人（9.9%）、「全くできなかった」が2人（2.4%）、未回答が1人（1.2%）であった。

レベル別に見てみると、レベルⅠ、Ⅲにおいて、「どちらともいえない」と回答した学生がそれぞれのレベルにおいて最も多く、特にレベルⅠについては、毎週の課題として出された曲を弾くだけにとどまり、十分に習得しているとは言い難い。よって新しい曲を譜読みすることに時間を費やされるために、レパートリーを増やしていくことが難しいと思われた。

レベルⅠに2人「全くできなかった」と回答した学生がおり、そのうちの1人は「幼児曲のレパートリーを増やすこと」、「指使いを守ること」、「強弱を守ること」についても同じ回答をしていた。「読譜能力（音高）」については、「あまりできなかった」との回答しており、練習時間については1週間のうち1日を平均して1時間～1時間半程度練習を行っていたことが分かった。我々の予想を超えた練習時間をとっているにも関わらず、幼児曲及びピアノ曲を全くレパートリーにできなかったことは、読譜能力低いことが深く関係していると推測されるため、読譜能力の向上、及び指使いを守る必要性を理解させることを徹底して指導することが重要と考える。

一方で、「あまりできなかった」「全くできなかった」について、レベルⅢにおいては0%という結果であり、ピアノの実力を着実に付けていっていることが予想される。

授業ごとに課題を出しているが、それは、譜面に慣れていろいろな指のパッセージを習得させることが目的である。したがって、課題を練習することがレパートリーを増やすことと必ずしも結びつくわけではなく、課題終了後の独自で行う学習が相当必要であると考えられる。

表4 それぞれの項目に対する練習成果の自己評価

全体(81人)	①読譜能力…音(音高)を読むこと		②読譜能力…音の長さ(リズム)を読むこと		③指使いを守って弾くこと		④曲に書かれている強弱記号を守る		⑤曲に書かれている記号(アクセント、スタッカート等)を守る		⑥幼児曲のレパートリーを増やすこと		⑦ピアノのレパートリーを増やすこと	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
全くできなかった	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%	4	4.9%	2	2.5%	1	1.2%	2	2.4%
あまりできなかった	9	11.1%	17	21.0%	8	9.9%	27	33.3%	11	13.6%	13	16.1%	20	24.7%
どちらともいえない	16	19.8%	28	34.6%	21	25.9%	22	27.2%	30	37.0%	22	27.2%	34	42.0%
ややできた	42	51.9%	28	34.6%	40	49.4%	20	24.7%	33	40.7%	30	37.0%	16	19.8%
とてもできた	14	17.3%	8	9.8%	11	13.6%	8	9.9%	5	6.2%	15	18.5%	8	9.9%
未回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
計	81	100%	81	100%	81	100%	81	100%	81	100%	81	100%	81	100%

表5-1 読譜能力(音高)を読むことについての、各レベルにおける自己評価の人数及び%

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		未回答	計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
レベルⅠ	5	11.9	20	47.6	9	21.4	8	19.1	0	0.0	0	42
レベルⅡ	1	5.6	11	61.1	5	27.7	1	5.6	0	0.0	0	18
レベルⅢ	1	33.3	1	33.3	1	33.3	0	0.0	0	0.0	0	3
レベルⅣ	5	41.7	7	58.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	12
その他	2	33.3	3	50.0	1	16.7	0	0.0	0	0.0	0	6
計	14	17.3	42	51.9	16	19.8	9	11.1	0	0.0	0	81

表5-2 読譜能力(リズム)を読むことについての、各レベルにおける自己評価の人数及び%

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		未回答	計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
レベルⅠ	1	2.4	16	38.1	12	28.6	13	30.9	0	0.0	0	42
レベルⅡ	2	11.1	4	22.2	11	61.1	1	5.6	0	0.0	0	18
レベルⅢ	0	0.0	1	33.3	2	66.6	0	0.0	0	0.0	0	3
レベルⅣ	4	33.3	5	41.7	2	16.7	1	8.3	0	0.0	0	12
その他	1	16.7	2	33.3	1	16.7	2	33.3	0	0.0	0	6
計	8	9.8	28	34.6	28	34.6	17	21.0	0	0.0	0	81

表5-3 指使いを守って弾くことについての、各レベルにおける自己評価の人数及び%

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		未回答	計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
レベルⅠ	5	11.9	24	57.1	9	21.4	3	7.2	1	2.4	0	42
レベルⅡ	2	11.1	10	55.5	3	16.7	3	16.7	0	0.0	0	18
レベルⅢ	1	33.3	1	33.3	0	0.0	1	33.3	0	0.0	0	3
レベルⅣ	2	16.7	3	25.0	7	58.3	0	0.0	0	0.0	0	12
その他	1	16.7	2	33.3	2	33.3	1	16.7	0	0.0	0	6
計	11	13.6	40	49.4	21	25.9	8	9.9	1	1.2	0	81

表5-4 強弱記号を守ることに、各レベルにおける自己評価の人数及び%

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		未回答	計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
レベルⅠ	1	2.4	12	28.6	11	26.2	16	38.1	2	4.7	0	42
レベルⅡ	4	22.2	2	11.1	5	27.8	6	33.3	1	5.6	0	18
レベルⅢ	0	0.0	0	0.0	2	66.6	1	33.3	0	0.0	0	3
レベルⅣ	3	25.0	6	50.0	1	8.3	2	16.7	0	0.0	0	12
その他	0	0.0	0	0.0	3	50.0	2	33.3	1	16.7	0	6
計	8	9.9	20	24.7	22	27.2	27	33.3	4	4.9	0	81

表5-5 記号(アクセント、スタッカート等)を守る事について、各レベルにおける自己評価の人数及び%

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		未回答	計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
レベルⅠ	1	2.4	16	38.1	19	45.2	5	11.9	1	2.4	0	42
レベルⅡ	3	16.7	4	22.2	7	38.9	3	16.7	1	5.6	0	18
レベルⅢ	0	0.0	2	66.6	1	33.3	0	0.0	0	0.0	0	3
レベルⅣ	1	8.3	10	83.3	1	8.3	0	0.0	0	0.0	0	12
その他	0	0.0	1	16.7	2	33.3	3	50.0	0	0.0	0	6
計	5	6.2	33	40.7	30	37.0	11	13.6	2	2.5	0	81

表 5-6 幼児曲のレパートリーを増やす事についての、各レベルにおける自己評価の人数及び%

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		未回答	計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
レベルⅠ	6	14.3	14	33.3	12	28.6	9	21.4	1	2.4	0	42
レベルⅡ	3	16.7	9	50.0	5	27.8	1	5.6	0	0.0	0	18
レベルⅢ	2	66.6	0	0.0	0	0.0	1	33.3	0	0.0	0	3
レベルⅣ	3	25.0	4	33.3	4	33.3	1	8.3	0	0.0	0	12
その他	1	16.7	3	50.0	1	16.7	1	16.7	0	0.0	0	6
計	15	18.5	30	37.0	22	27.2	13	16.1	1	1.2	0	81

表 5-7 ピアノ曲のレパートリーを増やす事についての、各レベルにおける自己評価の人数及び%

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		未回答	計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
レベルⅠ	4	9.5	5	11.9	20	47.6	11	26.2	2	4.8	0	42
レベルⅡ	2	11.8	4	23.5	5	29.4	6	35.3	0	0.0	1	18
レベルⅢ	0	0.0	1	33.3	2	66.6	0	0.0	0	0.0	0	3
レベルⅣ	2	16.7	5	41.7	5	41.7	0	0.0	0	0.0	0	12
その他	0	0.0	1	16.7	2	33.3	3	50.0	0	0.0	0	6
計	8	9.9	16	19.8	34	42.0	20	24.7	2	2.4	1	81

(4) 授業で使用している教材の習熟度（自己評価）について

授業内で使っている「コード本」「テクニック本」「幼児曲」「ピアノ曲」の教材を、学生たちがどの位、理解、習熟できているのかを自己評価させた結果は表6の通りである。

表7は表6のそれぞれの教材に対して、学生のレベルからみた自己評価の結果である。

① コードの理解と実践（コード本）についての、各レベルにおける自己評価の人数、および%（表7-1）

「コード本」について、「どちらともいえない」が最も多く26人（32.1%）、「ややできた」が24人（29.6%）、「あまりできなかった」が20人（24.7%）「とてもできた」が10人（12.3%）、「全くできなかった」が1人（1.2%）であった。

レベル別に見てみると、レベルⅠ、Ⅱの回答は「どちらともいえない」に集中し、レベルⅣは「ややできた」が最も多かった。このことから、コードの理解や実践について、学生の音楽経験に何らかの関連性があるものと考えられる。

レベルⅠで「全くできなかった」と回答した1人は、「テクニック本」（ピアノテクニック）については「とてもできた」と回答しており、コードの理解とピアノテクニックについては必ずしも関係性ある訳ではなさそうである。

幼児曲の簡易伴奏においては、コードの理解が必要と考えるため、絶対音感の有無に関係なく取り組めるハ長調を用いて、主要三和音のコードの性格の把握と、簡易伴奏の実践を行う必要があるだろう。

② ピアノの基礎的なテクニック（テクニック本）についての、各レベルにおける自己評価の人数、

および%（表7-2）

「テクニック本」について、「ややできた」が33.3%、「とてもできた」が22人（27.2%）、「どちらともいえない」が21人（25.9%）、「あまりできなかった」が9人（11.1%）、「全くできなかった」が2人（2.5%）であった。

レベル別に見てみると、「とてもできた」「ややできた」で6人ずつ回答しており、ピアノテクニックを着実に身に付けていることが推測される。

一方で、レベルⅠの2人の学生は「全くできなかった」という結果であった。自由記述では「まだまだ基礎ができていないことに気付いた」「基礎向上はしたけどまだまだだった」と回答していた。ピアノを弾くうえで必要となる基礎的な運指、および、指の独立などを、個別に指導する必要があるだろう。

③ 幼児曲についての、各レベルにおける自己評価の人数、および%（表7-3）

「幼児曲」について、「ややできた」が30人（37.0%）、「どちらともいえない」が26人（32.1%）、「あまりできなかった」が16人（19.8%）、「全くできなかった」が7人（8.6%）、「とてもできた」が2人（2.5%）であった。

レベル別に見てみると、レベルⅠの学生で「全くできなかった」という回答が5人、「あまりできなかった」が11人いることが分かった。表5-4のピアノ曲についての同レベル、同項目を比較しても、幼児曲の方が習熟度が低いという結果であったが、ピアノ曲と幼児曲のピアノの練習時間の配分がうまくできていないのか、幼児曲のほうが学生にとって難しいのか、本調査では明らかにすることはできなかった。

幼児曲は採用試験だけでなく、この後の保育士として現場で使い続けていくため、在学中に多くの曲に触れておく必要がある。従って、学生への課題について、幼児曲、ピアノ曲の両方のバランスを考えて学生に練習させる必要があると感じた。

④ ピアノ曲についての、各レベルにおける自己評価の人数、および% (表7-4)

「ピアノ曲」について、「ややできた」が42人(51.9%)、「どちらともいえない」が27人(33.3%)、「あまりできなかった」が7人(8.6%)、「とてもできた」が4人(4.9%)、「全くできなかった」が1人(1.2%)であった。

レベル別に見てみると、レベルⅢ、Ⅳの学生については、「あまりできなかった」「全くできなかった」

」の回答が0人であった。これらの学生は、「ピアノのレパートリーを増やすこと」と「ピアノ曲の習熟について」の結果が一致していたため、ピアノの技術を効率よく伸ばしたと推測できる。

また、レベルⅣの自由記述で「ペダルが使えるようになってよかった」と回答した学生がおり、音楽表現の幅をひろげられたようであった。レベルⅠの「全くできなかった」と回答した学生は、「指使いを守ること」「強弱を守ること」「ピアノ曲のレパートリーを増やすこと」においても同じ回答をしており、授業外にどのようなピアノの練習を行っているのかを具体的に把握し、来年に行われる採用試験までにピアノ技術が向上するよう、個人レッスンにおいて適切な指導が求められると考える。

表6 使用材料の習熟度について

全体(81人)	①コードの理解と実践 (コード本)		②ピアノの基礎的なテクニック(テクニック本)		③幼児曲		④ピアノ曲(バイエル ピアノ教則本、他)	
	(人数)	(%)	(人数)	(%)	(人数)	(%)	(人数)	(%)
全くできなかった	1	1.2%	2	2.5%	7	8.6%	1	1.2%
あまりできなかった	20	24.7%	9	11.1%	16	19.8%	7	8.6%
どちらともいえない	26	32.1%	21	25.9%	26	32.1%	27	33.3%
ややできた	24	29.6%	27	33.3%	30	37.0%	42	51.9%
とてもできた	10	12.3%	22	27.2%	2	2.5%	4	4.9%
未回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	81	100%	81	100%	81	100%	81	100%

表7-1 コードの理解と実践(コード本)

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		計 人数
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
レベルⅠ	3	7.1	14	33.3	16	38.1	8	19.1	1	2.4	42
レベルⅡ	3	16.7	4	22.2	7	38.9	4	22.2	0	0.0	18
レベルⅢ	1	33.3	0	0.0	1	33.3	1	33.3	0	0.0	3
レベルⅣ	3	25.0	6	50.0	2	16.7	1	8.3	0	0.0	12
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	6	100.0	0	0.0	6
計	10	12.3	24	29.6	26	32.1	20	24.7	1	1.2	81

表7-2 ピアノの基礎的なテクニック(テクニック本)

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		計 人数
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
レベルⅠ	9	21.4	14	33.3	14	33.3	3	7.1	2	4.8	42
レベルⅡ	6	33.3	5	27.8	4	22.2	3	16.7	0	0.0	18
レベルⅢ	1	33.3	0	0.0	1	33.3	1	33.3	0	0.0	3
レベルⅣ	6	50.0	6	50.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	12
その他	0	0.0	2	33.3	2	33.3	2	33.3	0	0.0	6
計	22	27.2	27	33.3	21	25.9	9	11.1	2	2.5	81

表7-3 幼児曲

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		計 人数
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
レベルⅠ	1	2.4	13	31.0	12	28.6	11	26.2	5	11.9	42
レベルⅡ	1	5.6	5	27.8	7	38.9	4	22.2	1	5.6	18
レベルⅢ	0	0.0	1	33.3	2	66.6	0	0.0	0	0.0	3
レベルⅣ	0	0.0	8	66.7	3	25.0	1	8.3	0	0.0	12
その他	0	0.0	3	50.0	2	33.3	0	0.0	1	16.7	6
計	2	2.5	30	37.0	26	32.1	16	19.8	7	8.6	81

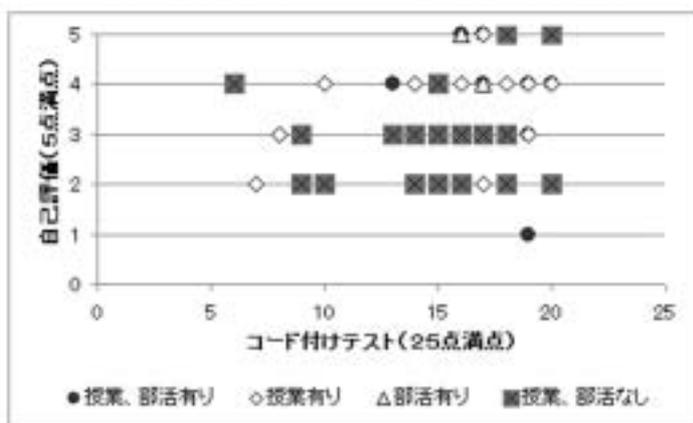
表 7-4 ピアノ曲

	とてもできた		ややできた		どちらともいえない		あまりできなかった		全くできなかった		計 人数
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
レベルⅠ	1	2.4	23	54.8	11	25.2	6	14.3	1	2.4	42
レベルⅡ	0	0.0	9	50.0	8	44.4	1	5.6	0	0.0	18
レベルⅢ	0	0.0	1	33.3	2	66.6	0	0.0	0	0.0	3
レベルⅣ	3	25.0	6	50.0	3	25.0	0	0.0	0	0.0	12
その他	0	0.0	3	50.0	3	50.0	0	0.0	0	0.0	6
計	4	4.9	42	51.9	27	33.3	7	8.6	1	1.2	81

(5) 高校での音楽経験の有無によるコードの理解度

高校時代の音楽経験の有無により、コードの理解度に差が見られるのかを把握するための担当クラス(81人)について、前期末に行ったコードテスト(25点満点)の結果と、その学生たちの高校時代の音楽経験を相関した結果は、図1の通りである。

図1 高校での音楽経験によるコードの理解度を示した散布図



その結果、授業と部活動の両方において、音楽経験のある学生は、自己評価およびコードのペーパーテストともに、高い値が見られた。一方、授業と部活動の両方において、全く音楽経験のない学生は、同項目において低い値であった。

この結果から、特に部活動においては、合唱、合奏、吹奏楽などの音楽経験によって、音感や音楽様式などが自然と身につけていたと思われる。これらの演奏形態において、個々のパートが音楽の和声内において1つの和音を形成する役割を担っており、和声進行における適切な音の移り変わりを1つの旋律の流れとして捉えることができるという利点がある。従って本授業内において、幼児曲の弾き歌いやピアノ曲の演奏だけでなく、合唱や合奏を取り入れることによって、コードの習得に役立つ和声感を身に付けさせることが必要であると考えられる。

(6) 前期末テストにおける学生(レベルⅠ)の自己評価と、それらの学生に対する指導者の評価の比較について

前期末テスト(幼児曲)において、「リズム」「強弱」「速度」「暗譜」「曲のイメージを表現できたか」について、5段階の尺度で学生(レベルⅠ)に自己評価させた結果、およびそれに対する指導者の評価の結果は図2の通りである。

幼児曲およびピアノ練習曲の両方を分析した結果、学生の自己評価と指導者の評価は、ほぼ同じ傾向であったが、中でも幼児曲は、両者の評価間に差が見られた。

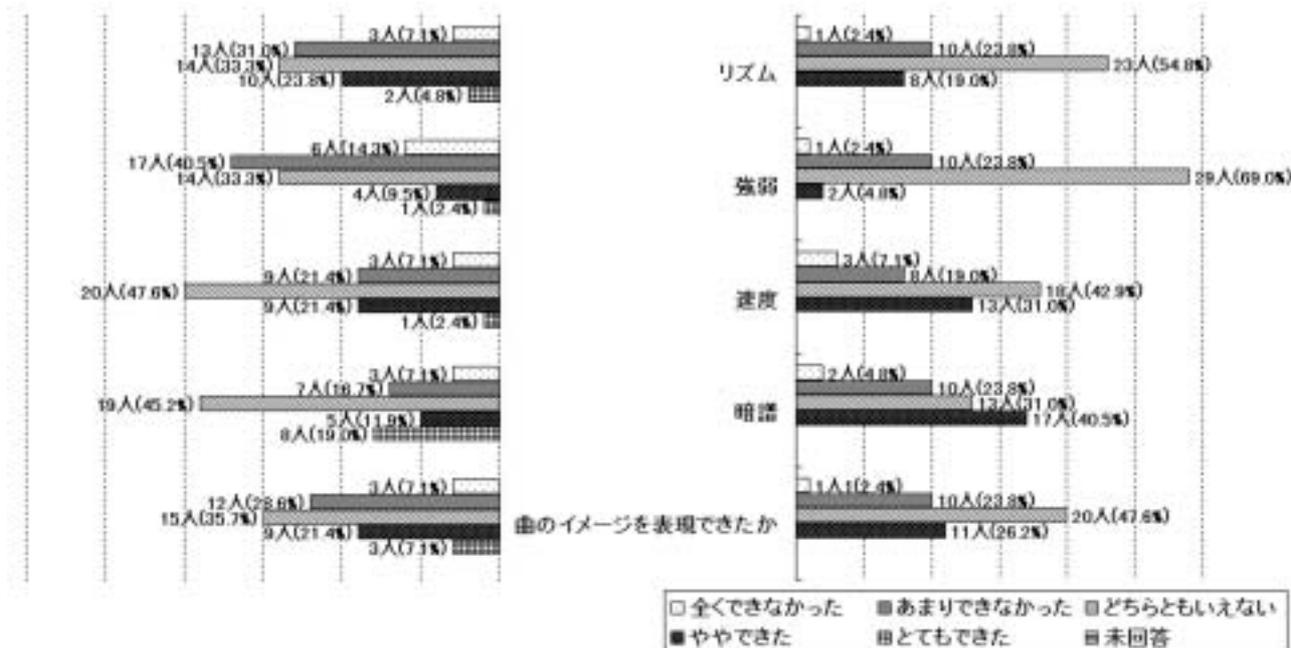
特に両者の評価間に差がみられた尺度「全くできなかった」「とてもできた」について詳細に分析したところ、「暗譜」に関しては、学生自己評価「とてもできた」と回答した学生が8人だったのに対し、指導者の評価は0人であった。その8人について指導者の評価を分析したところ、「ややできた」が3人であった。「どちらともいえない」は5人であり、

学生の自己評価と指導者の評価との間に差が見られた。この5人はレベルⅠの学生であり、これから多くの幼児曲を覚えていく上で、過大評価をしていることは問題であるため、常に保育現場を意識して正確な暗譜に取り組むよう促す必要性があると考えられる。

また、「強弱」について、「全くできなかった」と回答した6人の内2人は、指導者評価において「どちらともいえない」であった。その他の4人の内3人は、「あまりできなかった」、残りの1人は「全くできなかった」という指導者評価であった。まずは、強弱を意識してつけることが、演奏における表現の第一歩と考えるため、過小評価している学生に対し、自信を持って表現できるよう適切な指導が求められると考える。

「曲のイメージを表現できたか」について、「全くできなかった」と自己評価した学生が3人、この3人についての指導者評価は、3人のうち2人は

図2 前期末テスト（幼児曲）における学生（レベル1）の自己評価と、その学生に対する指導者の評価  
 ※左側は学生（レベル1）の自己評価、右側はその学生に対する指導者の評価である



「全くできなかった」「あまりできなかった」という評価であり、残りの1人については「ややできた」という評価であった。この1人の学生については、「強弱」においても過小評価をしており、イメージしている曲の完成度が高いことが推測されるが、積極的な表現を促すため、自信をつけさせることが重要である。

「リズム」で「とてもできた」と回答した2人について、指導者の評価は「どちらともいえない」であり、両者の評価間に違いが見られたが、「全くできなかった」と回答した3人に関しては、学生の自己評価と指導者の評価がほぼ一致しており、学生自身が適切な自己評価を行っていたことが分かった。

これらの比較調査により、学生の演奏に対する到達目標がどこであるのか、また、学生自身の学習に対する意識の高さを、個々のレベルで把握することができた。

#### 4. 考察

今回の調査において学生自身の自己評価から明らかになったことは、入学時の読譜能力および基本的音楽知識の低さであった。これをふまえ、授業内において、前期の早い段階で楽語や音符などの基本的

な意味や、音楽における楽譜上の規則などを再確認するための時間を設け、学生への指導を行う必要性が感じられた。

また、学生の高校での音楽経験の有無によって、本授業で音楽知識を吸収する早さに差が現れる傾向がみられるため、授業内において、ピアノや弾き歌いの他に、合唱や合奏などを取り入れて、さまざまな演奏形態における音楽の実践を経験し、感性や和声感などを磨いていくことが、学生の表現力の習得につながると思われる。

ピアノ練習においては、指使いを守って弾くことにより、ピアノの進度が早くなることが分かった。したがって、テクニック本を徹底してレベルIの学生に取り組むよう練習を促し、バイエル終了の段階へ早く進めるよう指導していくことが必要と考える。

ピアノ技術の習熟に関しては、ピアノ演奏基礎技術の向上以外にも、読譜能力、表情記号の認識、練習時間、練習方法などのさまざまな要素が絡んでおり、技術的な指導だけでなく、学生がピアノ習熟に向けた高いモチベーションを保つことが必要であろう。

本学の音楽の授業形態は、MLによる集団授業であり、学生のレベルにかかわらず、課題の曲に対し

学生同士が同じ曲を共有することで、お互い学習意欲を啓発し合いながら学ぶことができる利点がある。

一方で、指導者として、具体的に学生個々のレベルや習熟度を把握することが、学生一人一人の成長を助長していく上でとても重要であると考ええる。

また、学生の自己評価を分析することによって、どの項目に高い意識を持って練習に望んでいるのか、および、どのようなことを難しいと考えているのかを把握することができた。さらに、本調査では、幼児曲試験における学生の自己評価と指導者の評価を比較した結果、暗譜や強弱、曲を表現することについては、わずかではあったが学生と指導者との認識の違いが見られた。

今後の基礎音楽の授業において、学生の状況をより把握し、基礎技術のみならず表現についても分かりやすく指導していくため、今回の調査結果をふまえてさまざまな指導法を検討していきたいと考える。

指導者は、学生の習熟度自己評価をもとに、学生自信が具体的にどのような到達目標をイメージして学習しているかを把握し、それによって何を達成することができたかを理解する必要がある。音楽的知識や演奏技術の習得における意識、意欲を支援し、学生が音楽に対して明確な目標を定めることができるよう、指導していくことが大切であると思われる。

## 5. まとめ

現代の日常生活では、あらゆる場面で音に触れる機会が多い。学生はさまざまな場所で、いろいろなジャンルの音楽に接し、無意識のうちに、音楽を身体で感じる事が可能な音楽環境がある。身体で受け止めた音楽を受容できることは、本来の音楽を楽しく感じる大切な要素である。そして、保育者として子どもの感性を育むためには、色々な音楽受容をするだけでなく、楽譜からの音楽を歌や音にして、保育者自身が子どもの音楽環境を構成したり、音環境をつくる事が求められる。

音楽は、楽譜に描かれた作曲者のメッセージをいかに、読み手が音に託して表現するかが重要な作業である。保育者として、聴いたり感じたりした多くの音楽を楽譜に返って、読み取って、子ども達に伝えるという表現に移して欲しい。

子どもの歌は、わらべうたから童謡、そして幼児の歌など、多くの歌がある。それらの歌を、保育者が歌って、子ども達に継承していくためには、基礎的な音楽の知識を持って、子どもの音楽活動を援助する力が必要である。

子どもの表現活動を促すことが出来る保育者を養成するために、音楽の基礎学習と表現力を同時に習得することをより意識し、音楽の表現技術を獲得できる授業検証に努め授業を展開していきたい。

アンケート

問1 あなたの入学時のピアノ学習経験を選び、右の回答欄に記入してください。

1. バイエル 60 番まで
2. バイエル 80 番まで
3. バイエル終了まで
4. ブルグミュラー、アラカルトなど
5. ソナチネ、ソナタ等
6. その他
7. 初めて

問2 あなたの現在のピアノ学習経験を選び、右の回答欄に記入してください。

1. バイエル 60 番まで
2. バイエル 80 番まで
3. バイエル終了まで
4. ブルグミュラー、アラカルトなど
5. ソナチネ、ソナタ等
6. その他

問3 あなたの1週間のピアノ練習時間で、1日の平均時間はどの位ですか？

1. 30分未満
2. 30分位
3. 1時間～1時間30分位
4. 1時間30分～2時間位
5. 2時間以上

問4 普段どのようにピアノを練習していますか？  
(例：楽器の種類、練習方法など)

問5 高校での音楽経験を、教えてください。

- (1) 授業
- (2) 部活動

問6 以下の項目について、あなたが4月からどのくらい意識して練習できたかを選んでください

1. 読譜能力…音（音高）を読むこと
2. 読譜能力…音の長さ（リズム）を読むこと
3. 指使いを守って弾くこと
4. 曲に書かれている強弱記号を守ること
5. 曲に書かれている記号（アクセント、スタッカート等）を守ること
6. 幼児曲のレパートリーを増やすこと
7. ピアノのレパートリーを増やすこと

問7 以下の項目（テキスト）について、どのくらい習熟できたかを選んでください。

1. コードの理解と実践（青い本）
2. ピアノの基礎的なテクニック（黄緑の本）
3. 弾き歌い（歌村）
4. ピアノ曲（バイエルピアノ教則本、他）

問8 自分の弾き歌いについて、以下のそれぞれの項目でどれ位実践できたかを選んでください。

1. リズム
2. 強弱
3. 速度
4. 暗譜
5. 曲のイメージを表現できたか
6. 5の曲の具体的なイメージを述べてください
7. 明るい声で歌えたか
8. 言葉が伝わるように歌えたか

問9 ピアノ曲について、以下のそれぞれの項目でどれ位実践できたかを選んでください。

1. リズム
2. 強弱
3. 速度
4. 暗譜
5. 曲のイメージを表現できたか
6. 5の曲の具体的なイメージを述べてください

問10 本日の試験の感想を、自由に述べてください。

問11 MLの集団授業について、気が付いた点を述べてください。

〈前期末テストにおける採点項目〉

・弾き歌いについて、以下のそれぞれの項目でどれ位実践できていたか。

1. リズム
2. 強弱
3. 速度
4. 暗譜
5. 曲のイメージを表現できたか
6. 明るい声で歌えたか
7. 言葉が伝わるように歌えたか

・ピアノ曲について、以下のそれぞれの項目でどれ位実践できていたか。

1. リズム
2. 強弱
3. 速度
4. 暗譜
5. 曲のイメージを表現できたか